
クトゥ○フ的ブックストア ～デスサイズ書店へようこそ～

アルシェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クトゥ。フ的ブックストア 〜デスサイズ書店へようこそ〜

【Nコード】

N97100

【作者名】

アルシェ

【あらすじ】

「俺死にたくない！ いやマジで！！」

ストライクゾーンと真ん中の少女からアルバイトの勧誘。漢なら必ずついて行ってしまうイベント。

ただ、同じ経験をした仲間として、一言アドバイスを送ろう。アルバイトをする場所の情報は前もってしっかり集めておけ。

さもないと、書店で異種族戦争を経験するはめになるからそのつもりで。

——夜端咲の手記、二十七ページより抜粋。

注1) 一話完結の短編連作形式です。

注2) 不定期連載です。

注3) あなたの中の旧支配者に対する見識が大きく変革する恐れがあります。

注4) 用法用量を守って、正しくお使いください。

注5) ノークレーム、ノーリターンでお願いします。

アルバイト一日目『アルバイト勧誘に旧支配者の影』（前書き）

あなたのクトゥルフ神話のイメージが崩壊する可能性があります。
二次創作に嫌悪のある方は見ないほうが懸命です。

アルバイト一日目『アルバイト勧誘に旧支配者の影』

「アルバイトやりませんか？」

旅の途中、まだ蝉が鳴き始め、夏もこれからという時に、俺はバイトの勧誘にあった。

この炎天下の中、白い長袖のワイシャツとジーパンを着用し、はつらつとそう言ったのは俺好みの美少女。

直射日光にもその色を変えないほど黒く、癖のないサラサラのショートヘアに、少し切れ長だが大きめの瞳、シャープに彫られたかのような鼻と口元、真夏に溶けない白雪のように白く透き通った肌、全体的に小柄な顔と華奢であり肉質の少ない体型。パーフェクトだウオ。ター。

「あ、あのう……聞いてますか？ もしもーし？」

極端に狭い俺のクリティカルポイントを的確に射抜いてきたその少女が勧誘するのだ、断る理由など――

「もちろんです！ やらせてください！ いや、むしろ付き合ってください！！」

あるわけがなからう！

俺はその少女の両手をがっしりと握りしめて了承を示した。その時少女は物凄く引いていたような気がするが、それは夏が見せた蜃気楼とでも思っておこう。

「あ、ありがとう……じゃあ三日後、この場所に来てもらえます？ 詳しい仕事の話を店長がしたいそうなんです」

少女から渡されたのは一枚のメモ用紙。記入されているのはアルバイト先の住所と電話番号、その詳細な地図だった。

意外なことに、それは俺が取っている宿のすぐ近くのようなだ。バイクで五分と言ったところだろうか。だが、その辺りの土地勘には詳しくなかったので、大体の周辺情報が浮かばなかった。

俺が首を傾げていると、少女は「じゃあちゃんと来てね」といっ

てきびすを返すと、さつさとどこかへ行ってしまうそうだった。俺はそれを見て慌てて引きとめる。

「？　どうかしましたか？」

「君の名前を聞いていない。教えてくれないか？」

名前を聞く俺を不思議に思ったのか、きょとした表情を見せるも、少年は夏の陽光に負けないほど朗らかに笑うと。

「秋、^{クトゥルフ}九都流負秋。それが僕の名前です」

彼はそう名乗った。秋、良い名前だと何度も心の中で反芻する。

一瞬名字に引っかかりを覚えたが、スルーする。そして、俺も名乗った、あまり好きではない名前を。

「俺は咲、夜端咲。咲と呼んでくれ、そう呼ばれ慣れてる」

秋はクスツと笑うと、「分かりました」と言って踵を返した。

俺はその後ろ姿に手を振りながら、今日の出会いに感謝していたのだ。

しかしここで、俺は二つばかりしつかり聞いておかなければならないことがあったのだ。

一つはバイトの職種、もう一つはバイト先の名前。それが俺の人生のターニングポイントだったなどと、思いもよらずに……。

三日後、俺は入り組んだ住宅街を四苦八苦しながらバイクで走り抜け、ここいらの大動脈である国道を道沿いに走り、やっとのことですその住所を見つけた。

「らんらん、らんらんらんらんらん」

妙に気味の悪い歌（自覚はしている）を口ずさみながら、上機嫌でバイクから降りると、その店の前に立った。

中々大きい店のようで、ちょっとしたボウリング場ぐらいの広さがある。その入口の上につけられた看板に店名が書かれていた。

「出朱砕頭……う、む？」

縦二メートル、横六メートルはありそうな看板に、見事なまでの達筆で店名が書かれていたが、どうやら俺の国語スキルでは読み取

れないようだ。かろうじて前の四文字は分かったが、それでも読み方までは分からない。

「ま、いつか。あゝきちゃゝん！ 今行くよゝ」

世界中の下心を溶かして固めたような笑顔で俺は、今時珍しい自動じゃない、いつかテレビで見たような強化アクリルガラスに酷似したドアを押し開けた。

「すいませゝん、イケメン一丁！」

「ぶざけんなコラア！」

「も、申し訳ありません！」

状況説明、入口で俺硬直、ガラの悪そうな真つ赤なモヒカンの兄ちゃんが怒鳴っている、それに頭を下げている気の弱そうなあんちゃん。

「だゝれゝがゝ万引きやったなんて言いやがりましたかゝ？ おゝれゝがゝ盗ったって証拠があんのかよゝ？」

どうやら気弱そうな店員は、モヒカンが万引きをしたところでも目撃したのだろう。

しかし、あんなった万引き犯は少し怖いからなあ。あの店員じゃ盗ってないで押し切られそうだし。

「ふっ……仕方ない。俺が何とかしてやろう」

そう意気込んでモヒカンに近づくと、その肩を掴んで振り向かせようとした。

「おい、その名古屋コーチン。正直に盗ったものだしやが――」
ぱさ。

モヒカンが隠し持っていたらしいコミックがタイルの床に落ちる。

「い、い、い、い、いやあああああああああああああああ

あ！」

ほ、本が、本がある！ 何で！？ どうして！？

A、よく見たらここは書店です。

「おい、テメエもいいがかりつける気か？ その店員と一緒に殺すぞ」

そういきがる名古屋コーチン、もといモヒカン。

「ば、ば、ば、ば、馬鹿野郎おおおお！ その黄色い口ばしでピーチクパーチク、殺すぞ、なんて言うなあ！ 貴様！ ここを何処だと心得る！？」

「はあ？」

あまりの事態に、言語中枢がショートし始めている俺を、モヒカンは呑気にクエスチョンマーク。俺は即座に隠れる場所を探した。

「お、おい！ 喧嘩売っという今さら逃げる気か？」

「黙れ！ ああ……もう遅い。く、来るぞ、アレが来る！」
ずん！

俺の叫びと重なって、何か重いものが床に落ちるような音が響いてくる。

ずん！

モヒカンにはその音の主が見えていない。しかし、俺は音の発生源がモヒカンの後ろに見えている。

ずん！

すぐ背後にそれがいることに気がついたモヒカンは、その存在の異様さ気がつき、顔を真っ白にして冷や汗をかいている。

そして、その音の主はこう言った。

「お客様、万引きは現行犯で処刑。ご存知でしたか？」

モヒカンの肩に置かれる馬鹿でかい触手。

「し、知りませんでしたああ——」

ゴシヤアアア！ ベキボキバキ！ メキヨメキヨ！

お見苦しい表現失礼いたしました。ここからは爽やかな俺の笑顔をお楽しみください（超混乱）。

僅か十秒の間にそのモヒカンは、原形を留めていない ピ——
になって赤い ピ—— を撒き散らしてスーパーに打っている合挽

ピ—— になっていた。

そして俺は、その惨状を起こした身長三メートルの魚介系宇宙人にしか見えない、おそらく書店員の姿から視線を逸らせずにいた。

そのグロイボディに、迷彩柄のワイシャツ、下も同様のカーゴパンツ、カラフルなエプロンに何故かベレー帽。

これはやばいと、その宇宙人から遠ざかろうとして後ずさりしたの
だが、

「あれ、咲さん。時間より早かったですね」

後ろには天使のような笑顔の秋ちゃん。

「だ、駄目だ！　ここは君みたいなイタイケな子がいい場所じゃない！　早く逃げないとこの世の旧支配者が――」

「お、秋遅かったな。バケツコンニャクゼリー弁当はまだあったか？」

「父さん、こちら辺のセボンイレボン回ったけどなかったよ。だから代わりにバケツ牛乳プリン弁当買ってきた」

「むう、そうか。なら仕方ないな」

和やかに談笑する魚介宇宙人の店員と秋ちゃん。

—え、てかその弁当何？ 突っ込み待ち？ 突っ込み待ちなのか？
まあ、それはいい。それよりもだ、

倒産↓とうさん↓トウサン↓父さん↓果てしない論理の葛藤と認めたくない事実を直視したくない心根↓↓さらなる葛藤。そして力オス↓↓↓結論……ゲハッ！（吐血）。

「って、ええええええええええええ！？」 親子？ 超絶美人の秋ちゃん、あのどう見ても地球外生命体なアレの、娘ええええええええええ！？ どう見ても他人だろ！ いやそれ以前に桜とビオラ。テぐらい違うんですけど！」

俺が悶えている間にも、その秋ちゃん父親らしきエイリアンはクリオネの捕食シーンのようにバケツ牛乳プリン弁当なるものを食って……おえっ！

ここからは俺のイケメンな顔をご堪能ください。

「む、そうだった。そんなことしている場合じゃない。早く逃げないと」

抜き足差し足忍び足……。

「咲さん、紹介します。こちら出朱砕頭書店の店長で、僕の父さんデスサイズの九都流負小五郎です」

「おお、秋が見つけてきたバイト君か。よろしく、私が店長だ」

まず第一に、俺は物音一つ立てずに二人の前を通り過ぎたはずだ。そして、ドアの前には誰もいなかったし、ずっとドアを凝視していたのは間違いない。

それなのにこの奇天烈な親子は俺の動体視力に挑戦状をたたきつけるような瞬間移動を行った。

前言撤回、秋ちゃんも相当人外である。

「あ、あのう……俺、やっぱりバイトするのやめたいんですけど……」

最後になるにつれて小さくなっていく自分の声と戦いながら、やめたい旨を必死に説明しようとする俺。

「そうか、分かった」

腕を組んで頷く店長。

「わ、分かってくれましたか!」

「うむ……秋、連れて行ってやりなさい」

「了解です」

がし!

「いつきまーす!」

「ぬうおおおおおおおおおおお!?!」

状況のよく掴めないまま、秋ちゃんにバックブリーカーをかまされたまま、バックヤードへと連れ去られる俺。

いやいやいや! どんな脅力してんですか秋ちゃん!?

その後は秋ちゃんに休憩室兼ロッカールームへ放り込まれ、笑顔で「頑張つてね」と応援されたのち、事情を聞かされていた休憩中の他の先輩二人(雲にヤギみたいな蹄が生えている女性(?))店員とヒトデ型の頭と触手を持ったよく分からん生物の店員)に身ぐるみを剥がされ以下省略。

そして休憩室を出た時には立派な書店員の姿に。

黒のスラックスに白いワイシャツ、特徴的なカラフルすぎるエプロン。

そして、俺の身の丈もそんな処刑鎌。

「わあ、やっぱり咲さんはデスサイズが似合いますね」

「うむ、店長の私ですら似合わなかったそれを見事に身につけている。あっぱれだ」

「いやあ……それほど——って言うかボケ！」

ガイン！

ノリ突っ込みでデスサイズを床に叩きつける。秋ちゃんはまあいいとして、邪神に褒められても嬉しくない。

「これは何だ！？ 何が悲しくて俺はデスサイズなんて持たないといけない！？ 書店員になることは諦めるとして、何ゆえデスサイズ！？」

半ギレになりつつ俺は、邪神店長に臆することなく詰め寄る。それで返ってきた言葉に耳を疑うことになるのだが。

「実は……ウチは出朱砕頭書店と名乗っておきながら、店の中でデスサイズを扱う者がいなくてねえ。そんな時丁度君が入ってきてくれた。これは天命だと思ってね。ははははは！」

「ははははは、じゃねえ！ いくら凶悪化する万引き犯に対応する法案『万引き犯？ じゃあ殺っちゃいなYO』に準じて武装しているとはいえ、他に武器あるでしょうが！ 拳銃でもライフルでもマシンガンでも！」

現在、日本の各地に存在する書店は、暴力によって書籍を強奪する万引き犯、通称万引きG（ジャイ。ンの略）メنزと呼ばれる集団は日本政府に対し、「日本中の本は俺達のも物。俺達のも物は俺達のも物」というジャイアニズム声明を発表。

政府は対抗処置として、各書店に銃火器その他の武装を許可した。そのため、書店で万引き、その他の不屈きな行為を行えば、先のモヒカンのような末路を辿る。

いやあ、無知って怖いね。

だから書店には近寄らない様にしていたのに、今では俺が店員と
言う有様。

お婆ちゃんは言っていた。書店に近づいてはならないと。

「うちは銃を使わない主義だからね、だからそれぞれ得意な武器を
選んでもらっている訳さ」

中にはこんな異常集団のような書店も存在する。

「だったら俺にも得意な武器選ばせてくださいよ……」

「うーん……じゃあこれは？」

二メートルはある両刃の両手剣。身幅が異様に広い。何処からど
う見ても某スーパーロボットゲームに出てくる、戦艦ぶった切り用
武装に酷似している。

「我が斬艦刀に、断てぬものなし——って違う！」

律儀に構えて放り投げる。

「次これ」

秋ちゃんが渡してくる、刃渡り六十センチほどありそうな銃剣×
二。

「我らは神の代理人、神罰の地上代行者。我らが使命は、我が神
に逆らう愚者を、その肉の最後の一片までも絶滅すること。エイ
メエエーン——って何処までやらせるんじやい！」

銃剣をそこらへんの壁にぶち当てて叫ぶ。

「結構乗ってたくせに……」「ノリノリだったよな？」「馬鹿だな」

誰かそんなことをぬかしやがっているが、オール無視。

「次！」

銃剣の次に渡されたのは、黒いグローブに付属した細い鋼線。所
謂鋼糸と呼ばれているものだ。

「小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋のシミでガタガタ
震えて命乞いをする心の準備はオウケイ？ ——って俺はウ。ルタ
ーさんじゃねえ！」

律儀にポーシングしてから突っ込む。

「じゃあもうデスサイズでいいんじゃないね？」

ヒトデ頭の店員がえらいかるーく仰る。

「もう……いいです。それで……」

自暴自棄ぎみに、床に投げつけたデスサイズを手取る。煮るなり焼くなり好きにすればいい。

「よし、じゃあ次は自己紹介をしよう！ ではまず時計回りから」

店長の掛け声で自己紹介が始まる。ってか、いつのまに集合した！？

「ええー一番右のヒトデ頭は古さんね。見た目に反して頭良いから何でも教えてもらってね。人食いコミック担当」

「よろしく」

律儀に頭を下げるヒトデ頭。以外に礼儀正しいのかも。

「あ、店長」

「む、何だ？」

「ペットにしていたシヨゴスが逃げました」

ぴきーん。ヒトデ頭の発言にその場が凍りついた。

「あ、でも、気をつけていれば人間しか襲わないんで心配ないです」

「「「「「ははは、な〜んだそうか」「「「「「」

「ちょ、待て！ 俺人間なんですけど！！」

そろって和やかになる人外どもに、虚しい抗議。もちろん聞き届けてもらえず。

「はい、次はシェブさん。咲くんは着替えを手伝ってもらったよね？ 彼女は魔導雑誌担当だ」

「ぽっ（照）」

え、何？ 何か俺見て雲（見たいな顔）が赤くなってる？ 何か、ヤバイ。

「どうやらシェブさんは咲くんを気に入ったらしいね」

ぽんと肩に置かれる手。

「へ？ いやそれは勘ベン、どうわあああああ——！？」

背後にいたのは爽やかに微笑むミイラのような男。いや、別に容姿はこの際どうでもいい。肩に置かれた手を中心に服が急速に劣化

していくのはどういう原理だ!?

「これこれクアチルくん。咲くんは人間だからほどほどにしたまえ」

「あつ、そうだった。いやあ、ごめんよ咲くん」

「うん、はい、いやいいから早くその手をどける!」

お見苦しい映像を放送してしまいました。一同お詫び申し上げます。

「さっきのがクアチルくん。人文書籍担当ね。その隣がイタ力さん」

「よろしくおね、ぎゃあああああああああああ……」

何? 何!? 俺店内飛んでるよ!? うわあ、みんながあんなに小さく見えるうううううううう。

「イタ力さんは気に入った相手を上空に連れまわす癖があるから気をつけてね」

「そーいうことは先に言えやああああああアアアアアアア」

――

数十分後。

「ええと、次はアトラックさん。この店一の常識人だから、困ったことがあつたらたよっていいよ」

「いやあ、そんなことないですよ店長」

うん、人間サイズの蜘蛛が常識人であるはずがない。それよりも俺が氷付けになっていることに誰も突っ込まないのかというより誰か助ける!

「他にもいるんだけどね、今日はシフトの関係で来てないからまた今度にしよう」

やつと終わった。あとは適当に仕事して帰ろう。

「んじゃ次はこの店のマスコットを紹介しようか。秋、呼んでくれ」
まだ何かあるんかい。もう何が出てきても驚かんが。

秋ちゃんは適当にそこらを向くと、可愛らしく何かを呼び始める。
「ティンちゃ〜ん、カナタちゃ〜ん」

む、犬の鳴き声? なんだ、マスコットだっていうからゴ。ラとかガ。ラを想像したんだがな。よかった、まともなようだ。

どうやら俺は、地獄の三丁目辺りの門を叩いてしまったらしい。
いや、地獄ならまだましだ。こんな邪なる神々に囲まれることな
んてないのだから。

だがこれは序章。

俺がバイトを始めて一日目。その日は幸か不幸か、デスサイズ書
店の業務の中で最も難易度低めな日だとは、後の俺が知る由もない。
ただ、当時の俺の心境はこうだった。

いっそ、ロードローラーで轢き殺してくれ。

アルバイト一日目『アルバイト勧誘に旧支配者の影』（後書き）

続きます。この後、主人公は様々な怪異に襲われ……（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9710o/>

クトゥ。フ的ブックストア ~デスサイズ書店へようこそ~

2010年11月19日01時55分発行